

第2分科会報告書

2002年3月2日

分科会の概要と感想（中坊 真）

出席者は約10人程度と、予想したよりもかなり少なくて残念であった。ただ、参加者の方々は、皆熱心な方ばかりであった。講師一人当たりの持ち時間が30分しかないので、せっかく遠くから来ていただいた高橋先生の講演にできるだけ時間を取ってほしいという要望が、参加者の中からあったため、第2分科会は予定よりも10分ほど早めに始めた。

最初の講演は、農業研究センターの主任研究員の高橋先生による、野草地と牧草地の比較の話から始まった。例えば牧草地は、肥料と投入すればより多くの牧草が得られるが、その分の管理費が必要になる。一方、すすきなどの野草は、収穫量や栄養価では牧草には劣るが、ほぼ無料で手に入れることができる。牧草と野草のそれぞれのコストパフォーマンスを考えると、ほとんど変わらないから、手間のかからない野草を利用した方が得策であるということであった。また、阿蘇以外の農家は草を手に入れることに苦労しているのに、阿蘇では野焼きで全部燃やしてしまっているのは、大変もったいないことだと指摘された。阿蘇に住む人々から見れば、すすきなどの野草が広がる草原は、ごくありふれた風景だけれども、草を手に入れるのに苦労している他の都道府県の酪農家や畜産農家から見れば、阿蘇は宝の山ということになる。

次にスライド写真で、モーモー輪地切りや三瓶山の草原景観復元事業などの例が紹介された。説明の中で特に印象的な言葉だったのは、「牛と人との共同作業」という言葉であった。阿蘇では、もともと農作業に牛馬は欠かせない労働力であった。しかし、農作業が機械化されるに従って、牛は単なる牛乳や食肉を生産するためだけに、飼われるようになってしまったのである。機械化されて全てがうまくいったかと言うとそうではない。例えば、輪地切りなどの草刈をする作業を考えると、自動化されても作業するのは人間であり、機械の使える場所というのは限られている。しかも、機械を購入するためには、多くの資金が必要である。ところが、牛を使えば機械では苦労する作業も、少しの手間で出来ることがあるのだ。しかも、資金はそれほど必要ではない。スライドでは、放置していた雑木林が、人が入れないほど植生が繁殖してしまった写真と、牛を入れて下草を食べさせて、人が通れるくらいにスッキリした雑木林の写真を見せていただいた。刈り払い機は危険で手間がかかるし、大変な肉体労働になるが、牛を利用することによって大幅に省力化できるという冷であった。

温故知新という言葉があるが、最新の技術を用いなくとも、昔のやり方を復活させることによって、輪地切りなどの作業を大幅に簡略化できる可能性が明らかになった講演であった。大変多くのスライドを用意していただいたために、予定していた時間を大幅に越えることになったが、充実した内容にあっという間に時間が過ぎてしまったように感じた。

次にグリーンストックの山内さんの講演は、配布されている資料を見ながらの解説であった。グリーンストックで最初に野焼き・輪地切りボランティアを募集する際に、山内さんが県の農政課に相談に行くと、「誰が好き好んできつい作業をやりたいがるか！」という厳しい意見をもらったそうである。山内さん自身も、確かに重労働である作業を手伝ってくれるボランティアが、果たして来てくれるの

か不安であった。ところが、いざ蓋を開けてみると、最終的に 300 人近い参加希望者が集まった。中には、横浜から遠路はるばる何度も参加してくれる参加者がいるそうである。これには、山内さんも驚いて、どうしてボランティアの人たちが参加してくれるのか、その原因について考えてみたそうである。いくつかの理由については、講演集の中に詳しく書かれているので省略するが、大分県で募集してもそれほどボランティアが集まらないことから、阿蘇の持っている魅力が大きいのではないかという話であった。

大滝先生は、豊富なスライドを一つ一つ丁寧に解説していただいた。モーモータン地切りの調査・研究に携わる姿勢は、70 歳の高齢とは思えない大滝先生の若々しさを感じさせるものであった。例えば、夏の炎天下の中を、一日中あか牛とともに過ごし、5 分毎にその行動記録をつけていくという作業は、聞くだけでもその大変さがしのばれる。また、牛のストレスを軽減するために岩塩を与えると、一日中岩塩をなめつづける牛がいて、一日でレンガブロックほどの岩塩がなくなってしまったというエピソードには、笑いが起きた。そのような尽力の結果、得られた成果と可能性は、参加者を十分納得させるものであった。特に、牛を細微にいたるまで観察する大滝先生の姿勢に、多く学ぶ点があると感じた。

大滝先生や高橋先生が多くのスライドや参考資料を用意された講演であったのと対照的に、百姓村の山口力男さんの講演は、スライドなどの資料は全く用いず、自分自身がプレゼンテーションの全てであるかのように、室内に響き渡る声と大きな身振りで、ユーモアと迫りに満ちた講演であった。最初に、この講演で主体者であり、実行者である農家の出席率の低さについて問題があるとし、阿蘇に住む人々の意識を変えていく必要があるという話から始まった。講演の中心となった狂牛病の話題では、イギリスで狂牛病が発生してからの日本政府の対応と、狂牛病の牛が日本で見つかったからの政府の対応のまずさに対する怒りを、独特のユーモアと皮肉たっぷりに語られた。高橋先生の講演で取り上げられた、三瓶山での狂牛病を追い風に安全な食肉の取り組みについては、あか牛は確かに安全だと言う確証はあるけれども、我々のあか牛は狂牛病とは無縁で安全という取り組みではなくて、もっと正攻法であか牛の消費拡大を狙いたいという野望と期待をのぞかせる講演であった。

最後の討論会は、予定時間を大幅にオーバーするほど、盛り上がり密度の濃い議論が出来た。コーディネーターである私が司会・進行を勤めたが、農業や草原に関して素人である私が司会を勤めたことによって、参加者が比較的気楽な雰囲気発言できたのではないかと、自画自賛したい。一方で、この分科会で得たことを、如何に今後にかかしていくかという問題は、自分にとって大きな課題になった。この分科会で話し合われた内容が、単なる話し合いで終わるのではなく、何らかの成果となることを期待している。

小野敦子さんの感想文

今回、第 2 分科会「草原と人々の暮らし 畜産と地域社会」に出席し一番強く感じたことは、牛の存在には限りない可能性があるということである。高橋先生が「莫大な資産」と表現した阿蘇の広大な草原維持に欠かせないのが野焼きであるが、その防火帯を作る輪地切りでの牛の活躍もその一つである。加えて和牛には牧草より野草の方が合っているということから、阿蘇では牛本来の姿を生かしながら草原と畜産を互いに利用しながら守っていく方法があるということを知り、これからの農業

と草原維持に希望を見出すことができた。阿蘇で生きることを考えたとき、草原と畜産を切り離すわけにはいかない問題を、農家に生まれた私は自分の問題として捉えることができた初めての機会でもあり、変化しつつける世の中であっていかに農のある暮らしが人間にとって豊かであるかを改めて実感させられた。それゆえに狂牛病問題でますます畜産が低迷することは阿蘇の将来に暗い影を落とすであろうし、今正しい知識と勇気をもってこれらの問題に取り組まなければ阿蘇が阿蘇でなくなってしまうようにも思えた。

阿蘇に住むものが参加すれば誰でも何かしら心に響くものがある素晴らしい分科会であっただけに、実際の農家や消費者の方々の参加がなかったことは果たして分科会の意味があったのかと思う大きな反省点である。

デザインセンター長野氏のメモから

『総討論会で出た主な意見』

「井野」 短い時間だったが、非常にいい内容だった。もっと多くの人々に来て聞いてもらいたかった。

「高橋」 島根の人々は狂牛病発生後も元気に畜産をやっている。気にしていない。

「山口」 肉の値段が下がっているのだから、気になるでしょう？

「井野」 現在値段は、じわじわと下がってきている。ポディーブローのように。

「高橋」 畜産を専業でやっている人が少ないからかもしれない。

「 」 あか牛は、中の上くらいの値段を狙って育てている。
全てではないが、牛の値段が上がれば、問題解決する。
高齢者・後継者問題をどうするか？
モーモー輪地切りでも出来なくなるのでは？

「大滝」 モーモー輪地切りは、牛を出す人がいれぼうまくいくが、なかなか他の地域では、そういかないのが現状である。(牛がやせると心配している。実験では大丈夫だった。

「参加者」 子供たちに今日のような話しを聞かせ、伝えていかないと後継者不足は解決していかないだろう。

「山口」 農家は、草原を守るために畜産経営をしているのではない。自分の畜産経営のための営みが、結果的に今までの草原維持となっている。

社会全体が低迷している理由が高齢化であって、けして農業だけでない。

「高橋」 島根のグループは高齢者(55歳~88歳)。しかし楽しみでやっていて元気である。

「山口」 牛飼いは高齢者でもできる。

「山口」 まず高齢化問題は、前提として考え、それだけをひとつの問題として取り上げてはいけない。社会全体がそうなっているのだから。

牛工場みたいなものだったら、若い者にしか出来ないが、牛と営み、共存していけばできる。それに農業には定年がない。

「高橋」 農業は、普通定年している年齢でも収入がある。また、農業は福祉にも繋がる。

「山口」 農業には、悲観的な話題よりも希望的な話しの方が3倍くらいある。しかし問題抜きには語れない。

「井野」 どうしても高齢者よりも若い農家に支援する体制であるのが現状である。(畜産農協)

「山口」 その体制は、変えないとまずいよ。

「全員」 牛は好きでないと飼えない。

「高橋」 国でもいろいろとマニュアルがあるが、それに出来ない技術（天候を読む etc）がたくさんある。

農業にはいろいろやり方があるが、楽しむ農業も必要。

「山口」 ボランティアと村人で、新しい村が作れれば面白い。そういう意味でボランティアは重要。後は入会権などの問題がどうにかできれば。

「高橋」 沖ノ島では、住民票を移せば入会権が発生する。

「山内・山口」 ボランティアと村人でF1（交雑種）の村づくりのチャンス。

「高橋」 レンタルの電気牧策・草原などやったら面白い。GSで取りくんでは？

「参加者」 もっと都市住民を草原いれてはどうか？（GTなどで）マナーさえまもれば。

「全員」 柵さえ閉めてくれれば、牛が外にでないからいいんだ。

「山口」 都市住民よりも猟師のほうが、マナーが悪い。毎年柵を切る。

「大滝」 これからのボランティアはモーモー輪地切りのパトロールなども必要である。